

---

# 月光恐怖症 (原作:春野天使先生『恐くない幽霊』)

カンコツ工房

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月光恐怖症（原作：春野天使先生『恐くない幽霊』）

### 【Zコード】

Z5898D

### 【作者名】

カンコギト房

### 【あらすじ】

“換骨奪胎小説”プロジェクトの第2弾は、春野天使先生のホラータッチコメディをリメイクしました！あなたには、“怖いモノ”はありますか？

例えばピーマンを嫌いな人がいて、食べるどころか見るのも嫌だと思つてたとしても、それは「ピーマン恐怖症」とは云わない。それは単なる「ピーマン嫌い」だ。

では犬が大嫌いな人がいて、犬を見るのも、吠え声を聞くだけでも身がすぐむほど苦手だったとしたら、これは程度によつては「犬恐怖症」かもしれない。

「学校恐怖症」というのもある。

不登校とは異なり、これは対人恐怖症のひとつで、登校時に身体の不調を訴えたり、パニックを起こしたように暴れたり、自分の世界に閉じこもつてしまつたりする。

かくいう僕は、ピーマンは大好物だし、好き嫌いはほとんどない。犬は小さい頃飼つてたし、散歩は僕の担当だつた。

学校にはインフルエンザとノロウイルスに罹つたとき以外は小・中・高と皆勤賞に近かつた。

そんな僕も今年で二十歳になるが、いまだにひとつだけ克服できない“怖いもの”があつた。

そしてこの“恐怖症”は、たぶんこれは、努力や治療でなんとかできるようなものではない……。

まあ、それはそれとして。

世の中全く奇妙なことが起こるもんだ。

たいがいのことでは驚かない僕なのだが、これにはほんの少し驚いた。

そして、あきれた。

昨日から降り始めた雨が今日も降り続いている。

僕としたことがうつかりしていた。ゼミの発表の準備で帰宅するのを遅れた。

冬の日暮れはやっぽり早い。雨が降っているともなると、夕方はもつまつ暗だ。

僕はいつも使ってる特大サイズの黒い雨傘を差して家路を急いだ。

僕が住んでいる寮の近くの、川縁の歩道。

街路樹は柳の木だ。

この辺りの町並みはとても古くて歴史がある。川縁の歩道もすいぶん古くからある道を最小限の舗装でそのまま使っていると聞いたことがあった。

独特の、肩胛骨から首筋に抜けるぞくつとする感触 空気の変化を感じた。

云つていなかつたが、僕は靈感が強い。体質的に、金縛りにもよく遭うし、交通事故の現場などではリアルな、見分けのつかないような「者」の姿を見ることがある。そういうた“瘴気”の多い場所では頭痛や、吐き気に見舞われることも多々あった。まったく不便な体質だと我ながら思つ。

そう。

靈視能力つてのは、能力ではなくてやつぱり“体質”だ。

静かに音もなく降りしきる雨の中。

柳の木の陰ら辺に、空間のゆがみのよつた、青い、白っぽい影が見えた。

女だ。  
年齢は分からない。  
酷い怪我をしている。

顔面は二つに割れ、つぶれた眼球が頬にこびり付いている。

多量の血液で凝固した長い黒髪がごわごわと不自然なヘアースタイルを形作っている。

左の肩から鎖骨にかけては完全にひしゃげており、左腕はからうじて外れずにぶら下がっている、といった具合だった。

僕の足が止まつた。

立ち止まつと思つて止まつたのではない。勝手にストップさせられたのだ。

僕は機嫌が悪くなる。

いつものことだが、無差別な靈障なんて止めて欲しいと思つ。テ口である、こんなもん。

いや、無関係じゃなくとも（以前は僕の五代前の先祖の悪事が原因で祟られたことがあった）、成仏せずにタナトスでネガティブなエネルギーとして現世にこびり付いているこれら“幽靈”的存在を、僕は嫌悪し忌み嫌つっていた。

女の幽靈は、僕の方に潰れていない右目の眼球を動かして、視線をくれた。

僕は苛立ちを目力に込めて睨み返した。

「…………」

氣のせいか、幽靈はたじろいだかのよつて見えた。

( 消えろ つーー )

僕はありつたけの敵意を込めて心中で念じた。

「…………ひー…………つーー」

今度は明確に、たじろいだ。

僕は辺りを見渡して他に通行人がいないのを確認して、女幽靈に告げた。

「どけ」

我ながら、ドスの利いた低い声が出た。

「お前が邪魔してんんだろ。俺は本氣で急いでるんだ。通せ」

幽靈の表情に怯えの色が走った。

「…………あの…………」

幽靈は、腐ったトマトが腐敗ガスを出すときのような弱々しい声でつぶやいた。

「なんだよ」

「い、いえ、あの…………」

見ていてイライラする怯えた崩れ果てた顔面で、聞いて殺意を覚えるような声を出す。

「わたし、……恐くないでしょ？」「？」

「どけろ。俺は急いでるんだ。どけ」

幽靈の意味不明な質問には取り合わずに僕は力ずくで幽靈の潜む柳の木の前を通過しようとする。

が、

動けない。

情けない顔と声をしているが、この地縛靈、そこそここの靈力は有しているようだ。

僕は内心かなりの焦りを覚えていたが　僕は一刻も早くアパートの部屋に戻らなくてはならないのだ！　地縛靈の方を睨み直して云つた。

「何の用だよ。俺は急いでるんだ。悪をするんなら他を当たつてくれないか」

「すいません……わたしも、焦ってるんです……」

「死んだ人間が、何を焦ることがあるんだよ。さつさと昇天しろ、この腐れモンが！」

「ひつ…… 酷い……」

「家路を急いでるだけの善良な通行人を強制的に足止めさせてる地縛霊に酷いなんて云われたかないな。さつさとじけこの破れ雑巾！」

「！」

「うつ…… ひつ…… ひ……」

地縛霊は、僕の悪態に耐えかねて嗚咽を漏らし始めた。鬱陶しい「」との上なに。

「………… わかった。俺は急いでる。しかしあ前がどうしてもなにか云いたいのなら、わざわざと云ふ。用があるんならさつと済ませよ」

まだ雨は降つてゐる。このまま雨がやまなければ心配は杞憂に終わるが、もし雨がやんでしまつたら……俺が最も恐れていの状況になつてしまふ。

想像しただけでも身の毛がよだつ、悪寒が走るつた気がした。

「じ、実は……」

幽霊はすがるつたで僕を見て、云つた。

「わたしを見て、怖がつてもいいでしょつか…………？」

「…………は？」

女地縛霊は絶命寸前のカラスのような声で事情を説明し始めた。

無理矢理急かして聞き出した内容はこうだ。

女はもう一百年も前に、貧しい家の食いぶち（子どもが七人もいたらしい）を減らすために自ら命を絶つたらしい。高い崖から身投げして顔面と左肩から地面に激突して死んだ。

しかし自殺した者の魂は自然には成仏できず、なんだかんだで、生前思いを寄せていた男と逢い引きをしたこの柳の木の下に想いが縛られて地縛霊になつたそうだ。

「……で、成仏するための条件に、108人の人間を怖がらせないといけないって……脈絡がねえな」

「生きている人との繋がりを通じて、地縛の“厄”的ようなものを、払つていただく必要があるのです。難しく云つて、生者の和魂にきたまを以て死者の荒魂あらたまを中和する、といつ……」

「ややこしい話は聞きたくねえつつてんだよ！だから！俺は幽霊とか驚かないんだ。慣れてるんだ！だから驚けつて云われても驚けねえんだよ！」

「わたしだつて、別の方に頼れるなら待ちますよ……。もう一百年も待つてるのであるから。……でも、今回の満月の今宵までに108人に達しなければ、わたしは永遠に現世に囚われ、転生することも叶わなくなるのです……！」

幽霊は必死だった。

「今宵、貴方のような靈を視ることの出来る御方にお逢いできたの

は、まさに千載一遇の機会なのです。この機を逃せば、もうわたしは現世を彷徨える無意味な人魂に成るしか御座いません。どうか、どうかわたしを助けると思って お力を貸し下さい！ 助けてください…… いつ！」

まったく、鬱陶しいことこの上ないと正直思っていた。だが、この江戸時代から紙魚のよつに現世にへばり付いてるこの女幽霊を成仏させて、可及的速やかにこの場を離れ、自分のアパートまで帰ることが、今の僕のとつては最優先すべき事柄であることは間違いない。

激昂しそうになる自分の感情を、理性を総動員してコントロールし、だいたい今日は毎回からいつもと調子が違っていたのだ。僕は、地縛霊に協力してやることにした。

「わかった。協力する」

「ほ、本当ですか……！ ありがとうございます、……助かります……！」

僕は一度川の方を向くと、それからゆっくりと幽霊の方を見た。

潰れた方の眼球を観察する。

眼窩の奥からはみ出した、灰色に濁つた汚いプラスチックのよな目玉が崩れた顔面に張り付いているのはなかなかに不気味だと思った。

僕は、

「うわああー！」

と叫んで、傘を持ったままその場に膝をついた。

「キシリ……じゃなかつた、コワ……！」

自分ではできる限り怖がつたつもりだった。

だけど、幽靈に変化は訪れない。

幽靈は、恨めしそうな視線で僕を見下ろしている。

「……駄目、です……。本気で怖がつてくれませんと……」

僕は頭にきた。

「無理！ どけ、もう協力せん！」

「ああっそんない無体な！ 見捨てないでくださいまし！」

「知るか！ 離せつ！ 僕は一刻も早く家に帰らないといけないんだつ！－！」

「堪忍してくださりよお！ お願ひしますうう－！」

馬鹿な押し問答だ。くだらない！ しかし、これ以上時間がかかるのは本気でマズイ。

「……あ」

雨が ！

雨足が弱くなつてきていた ！？

空を見る。

日が沈んだ暗い夜空。

雨雲に、切れ間がある ！

僕の全身を恐怖が貫いた。

「あ……あ……ッ！」

見てしまつ。

浴びてしまつ。

遮るものがない。

「……あ、貴方、今とてもいい表情をされていますよ……！ その  
調子で、怖がつてくださいまし」

幽霊の言葉は、ほとんど僕の耳に入つてきていなかつた。  
僕はすでに軽くパニック状態だ。

僕は、

月が、怖いのだ

やばい。

急げ。

空を見るな、傘で守れ。

しかし

幼い頃の記憶がフラッシュバックする。

雨傘ぐらごでは、本当は防ぐ」となんてできないのだ。

完全遮光の厳重カーテンをしている自室の中に入らないこと、あの時のようになつてしまつ……

脳裏をかすめる、血飛沫と絶叫の記憶

そして、

雨が上がった。

「うわあああああつつ……」

僕は恐慌状態に陥りつつあった。  
まだ、身体は自由には動けない。  
この腐れ女が呪縛してやがるからだ……  
幽霊は、そんな僕を期待の眼差しで見つめていたようだった。  
怒りが頂点に達した。

「離せやこのやうなあお……」

満月の光。

柳の枝が、雨上がりの風に吹かれて揺れる。

僕の目に、幼い頃に見たつきりの、丸丸の月の光　満月の  
月光が　　目に入った。

「ぐわああああアアツツ！－！」

凄まじい声が僕の喉から迸つていった。

「ぐうづ、ぐあああ……グ……グワアアアああツツ！－！」

恐怖にゆがむ、僕の顔。

恐怖に硬直する、僕の身体。

意識が、遠くなつていく

（　ありがとう、御座いました……－）

そんな声が聞こえたような気がした。

倒れ込んだ僕の視界に、女幽霊の安らかな表情が見える。

崩れた顔や飛び出した眼球は元どおりになり、生前の、古い美人の顔つきの女がゆつくりと僕の方にお辞儀をしているのが見えた。

でも、そんなこと気にしている余裕はない。

意識が、僕の意識が　　！

（グウウ……グウウウ……！）

僕の声ではないような声が、僕の喉から発せられている。

魔獣の、咆哮。

嫌だ。

変わりたくない。

あんな風になつて人を殺しまくるのはもう嫌だ……！

僕の右腕にはびっしりと毛が生えてきていた。

顔もだ。獣のよつに、黒い剛毛が全身を覆つていいくのが自分でもわかる。

衣服の下に、毛がみつしりと生えていく感覚が妙にリアルで

僕は、僕でなくなるのだ。

満月の光の下。

血を求める狼男に変化した僕はこのあどぢんな行動に出るのだろう。

う。

頼む、

あの時のように、  
人を殺しまくることだけは、  
やめてくれ つつ！！

『月光恐怖症』

完

(後書き)

いかがだったでしょうか？

原作者様のリメイクに際してのご要望は、「もう少し個性的な主人公にして欲しい」、「オチを毛虫以外のものにして欲しい」という2点でした。

登場人物の差し替えなどはせず、主人公も幽霊も、基本的な性格はそのままに、個性を煮詰めるというか捻つて膨らませてみました。オチについては……皆様のご感想をお待ちしております（笑）。

お読みいただきありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5898d/>

---

月光恐怖症（原作：春野天使先生『恐くない幽霊』）

2010年10月28日03時51分発行